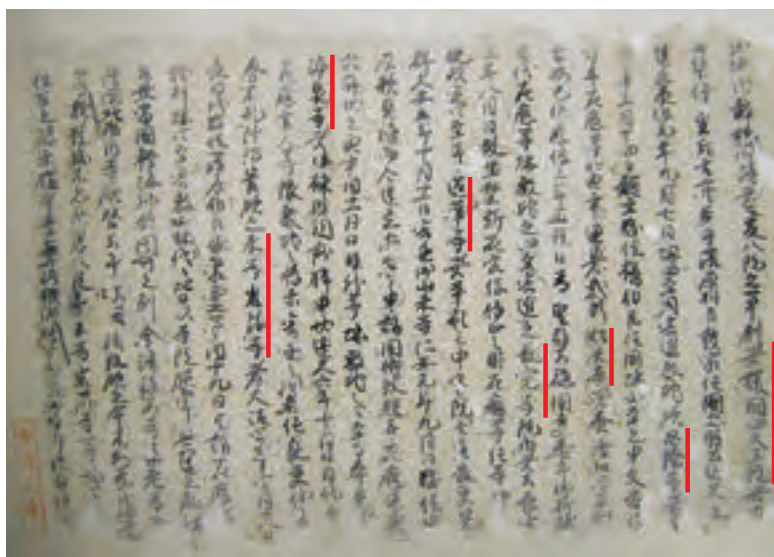


白山中宮八院の成立と安元事件

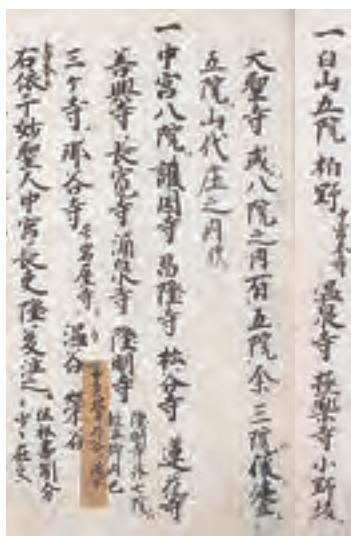
白山信仰の発展にともない白山登拝



元徳2年(1330)閏6月 白山中宮八院衆徒等申状案(部分)(横浜市 称名寺所蔵/神奈川県立金沢文庫保管) 護国四天王院・昌隆寺・松谷寺・長寛寺・蓮華寺・涌泉寺・末寺岩蔵寺八院の草創について記すが、善興寺・隆明寺はみえない。国守・目代・在庁官人が願主となり、建立や寺地が寄進されている。涌泉寺の敷地国免は、建久6年(1195)10月とする。

の拠点加賀馬場が形成され、白山本宮(白山宮・現、白山比咩神社)が中心の本宮四社に対し、中宮を中心とする佐羅宮・別宮は中宮三社と称し、双方独自に発展しながら連携もあった。白山宮は久安三年(一一四七)延暦寺の末寺となっている。涌泉寺など八か寺は、国衙に^{たいじ}対峙する形でその東南に位置し、白山中宮八院といわれ(『白山之記』では中宮八院)、十二世紀中頃には中宮末寺として成立していた。中宮は能美・江沼両郡に宗勢を伸ばし、勢威を誇っていた。

河法皇は平家準一門から加賀の知行権を奪回したのである。師高は、加賀の寺社・権門領に対し非法を重ねていた。翌年の夏、師高の弟師経が目代(代官)として加賀国衙に入って間もなく、白山中宮八院の一つ鷺川の涌泉寺の^{けん}検注(立入検査)を実施しようとして入部したが、寺僧の激しい反発をうけたことから、軍勢を率い涌泉寺を焼打ちした。当時涌泉寺の寺地は国衙の免税地でな



国指定重要文化財「白山之記」(白山市 白山比咩神社所蔵) 長寛元年(1163)ころ成立と推定される白山宮最古の縁起。

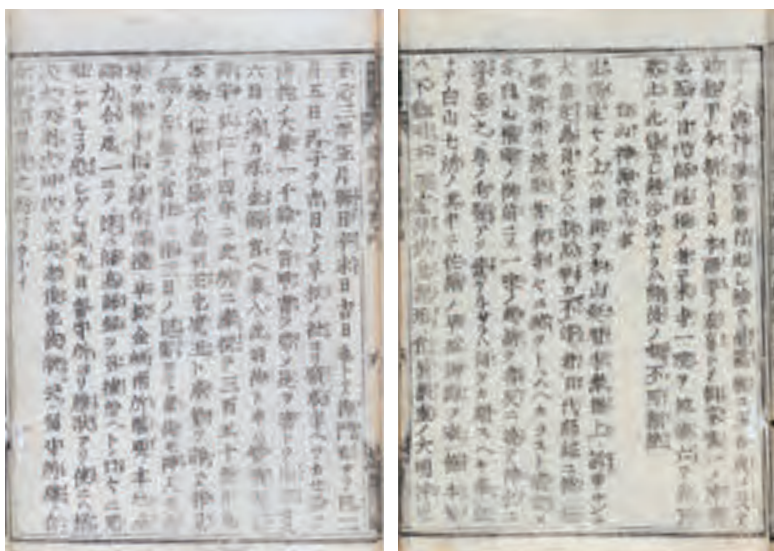


『平家物語絵巻』巻第一下「鶴川合戦の事」(部分)(岡山市 (財)林原美術館所蔵) 検注のため涌泉寺に立ち入った加賀国の目代藤原師経は、湯屋にまで押し入り、師経みずから湯浴みをし、さらに馬をも洗わせた。寺僧たちは、昔よりこの寺は国衙役人が入部することはないと横暴の停止を求めたが、師経は聞き入れず、憤慨した寺僧は師経秘蔵の馬の足を折り、師経方と寺僧の間で射あい斬りあう乱闘となり、師経方は敗色が濃くなって退散した。この後、師経は涌泉寺を焼打ちする。

く、目代師経が白山勢力の削減をはかる意図とはいえ、検注それ自体は不法とはいえないが、白山権現に挑戦するかのうように焼打ちにいたっては、まさに暴挙であった。

涌泉寺から通報をうけた中宮は、白山中宮三社八院の衆徒を結集し、惣長吏智積・覚明らを張本に大挙して国衙を襲撃したが、目代師経は京へ逃亡した。翌年正月、国衙側の制止をふりきり白山中宮三社八院の衆徒は、佐羅宮早松社の神輿を奉じ、師高・師経兄弟の処罰を勝ちとるため、本寺延暦寺の支援を求めて上洛することになる。

四月延暦寺の主導のもと、日吉七社・早松社の神輿を奉じた、延暦寺・白山中宮三社八院の衆徒は後白河法皇に空前の強訴を展開し、師高・師経の流罪が決定した。その後強訴の張本として天台座主明雲は解任・流罪となったが、



『源平盛衰記』巻四「白山神輿登山ノ事」(金沢市立玉川図書館所蔵) 白山中宮の衆徒が延暦寺に訴えんと、佐羅宮早松社の神輿を奉じて発向した様子を記す。

延暦寺衆徒は流罪途中の明雲を奪還し、六月一日平氏打倒計画が発覚し(鹿ヶ谷事件)、西光父子は殺害された。

加賀守師高・目代師経と白山中宮三社八院との対立に発した安元事件は、後白河法皇と平清盛との対立激化など中央政界を揺るがした。(清水郁夫)